

<今日の説教のポイント コリントの信徒への手紙 I 16 章 1-4 節>

今の時代も行う「募金」。初代教会が始めた募金から学ぶこと。

1 飢饉に遭ったエルサレム教会の貧しい人々を助けるために。

「**聖なる者たちのための募金**」。約二千年前、教会が生まれ出すと同時に募金活動が始まりました。それは大飢饉に見舞われたエルサレムの教会の、特に貧しい人々を支援するための募金でした（使徒言行録 11:29、ローマの信徒への手紙 15:26）。彼らはイエス・キリストによって神様の愛を知らされ、主から「**隣人を自分のように愛しなさい**」(マタイ福音書 19:19)と教えられました。その愛が身近な隣人にだけでなく、遠く離れた人々にも向けられた最初の取り組みでした。

2 自分に注がれた神様の愛を知った者が感謝し喜んで行う取り組み。

では、なぜ遠くの人々の苦しみに目が向けられたのでしょうか？ 同じ主を信じる人々のネットワークを通して、遠くの兄弟姉妹の苦しみと援助要請の声が伝わって来たからでした（ガラテヤ 2:10）。ネットワークが構築されていたことも大事ですが、イエス様を通して知った神様の愛に応えるネットワークであったということがより大事だと思います。パウロは、捧げる募金は福音(good news: キリストによる神様の救いの知らせ)に対する感謝の思いからなすべきものなのだから、「**各自、不承不承ではなく、強制されてでもなく、こうしようと心に決めたとおりにしなさい。喜んで与える人を神は愛してくださるからです**」(コリントの信徒への手紙 II 9:7。今日の箇所では、「**各自収入に応じて**」(2))、と教えています。

3 苦しむ人々のための取組の広がり、神様が喜んで下さること。

苦しんでいる人々のことを思い、そのために取り組む精神は教会内に留まるものではありません。先ごろ亡くなった緒方貞子さんと犬養道子さん(犬養毅の孫と曾孫)は共にクリスチャンであり、難民救済のために働き、そのための募金(犬養道子募金)も作り、その愛の精神と活動はキリスト者であるなしを超えて広がって行ったのでした。また、教会外の人々が取り組み出したことに神様の御旨のあることを見出し、信仰者や教会がその取り組みに参加して行く場合もあります。今日は礼拝後に映画上映会を行い、募金もありますが、その取り組みの前にこの箇所が与えられたことを神様に感謝したいと思います。